

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第157号

草創期の
柿生中学校 - 16

柿生隧道切り通しに

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆宅地化とモータリゼーションの進展で…◆

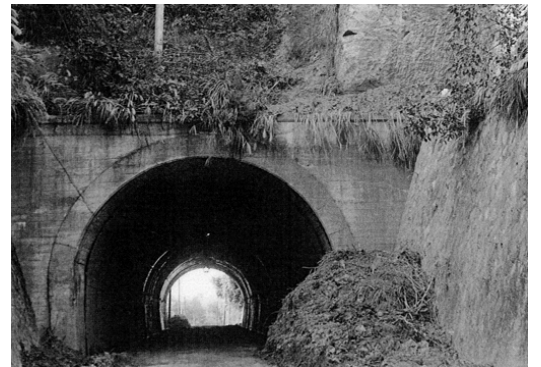
柿生隧道建設のいきさつは、第11回に記しました。柿生地域が川崎市に編入された昭和14(1939)年に掘削計画がたてられましたが、戦争のため先送りされ、昭和26(1951)年ようやく完成したトンネルでした。完成当時は首都近郊の閑静な農村地帯でしたから、車の通行は稀で、ほとんどは徒歩や自転車での通行でした。そんな柿生地域に変化をもたらすきっかけとなったのは、昭和31(1956)年の柿生～溝の口間の市営バスの運行開始でした。運転士と車掌さんが乗務し、車掌さんが車内を巡回して切符を切るボンネット型の車高のあまり高くないバスです。溝の口まで直通で運行するバスは、日に5本しかなく、朝の6時台～19時台まで全14本のうち、9本は琴平下止まり(後日吉まで延長されて、日吉止まり)だったのです。朝夕の混雑時でも、1時間に2本の運行でしたが、それでも、王禅寺や早野、下麻生の皆さんにとっては、柿生駅まで歩かずに済むことから、バスの運行は歓迎され、会社勤めの若い人たちが、下宿を引き払って自宅から通うようになるなど、地域が活性化する効果も見られたのです。

時に昭和30年代～40年代前半にかけての、岸内閣、池田内閣、佐藤内閣の時期は、日本の高度成長期にあたり、右肩上がりの高い経済成長が続きました。企業は競って生産設備を増強して増産に走ります。営業職員や輸出業務の担当者、さらに複式簿記をマスターした経理担当も揃えなければなりません。当然給与もまた毎年のように増えていったのです。そうすると、マイホームの夢も銀行ローンを組むことで可能になります。こうして首都近郊にあたる柿生地域にも宅地化の波が押し寄せてきたのです。

最初の大型造成工事は、住宅都市整備公団による百合丘団地の造成・建設工事でした。柿生に隣接する高石地区でした。

昭和35(1960)年3月に現麻生区では2番目の駅として百合丘駅が開設され、同年11月に百合丘団地の入居が始まりました。翌36(1961)年には、三井細山住宅の第一次入居が始まり、39(1964)年には、上麻生の亀井に警視庁職員用の住宅団地の用地買収が始まり、その前年には、規模は100軒程度と小規模でしたが、王禅寺の梨の木団地で買主たちによる宅地造成も始まりました。麻生台団地や虹ヶ丘団地の造成も60年代後半には行われ、70年代に入ると、小田急多摩線の建設工事が急ピッチで進み、49(1974)年には新百合ヶ丘駅が開設。翌年には多摩線が全線開通。沿線の宅地化も急ピッチで進んだのです。

柿生地域の宅地化の進展とともに、1960年代からの著しい変化は、マイカーブームの到来でした。柿生隧道を通過する自動車の数も年毎に増え続け、道幅の狭い柿生隧道はすれ違いに苦労するなど、次第に苦情が多くなります。トンネルの上部の地盤がゆるいため、大雨の折など写真のような小規模な土砂崩れが起きることもあって、そのたびに車は片側通行を強いられたことも、苦情の原因になりました。そこに座高の高い大型観光バスや重機を積んだ作業車両が通れないなどの問題も生じ、トンネル内で



昭和33年9月の柿生隧道

崩れた土砂を片側に片付けた様子が生々しい



切り通しとなった柿生隧道址

手前は柿生中学校の擁壁(平成12年当時)

若い女性の殺人事件が起きるなどしたことも、老朽化も進んで補強工事が必要となったことなども加わり、この際トンネルを壊して切り通しとし、道幅も広げようということに衆議一決したのです。道幅を広げるために必要な用地については、東の真福寺側と西の上麻生側とが、何度も協議を繰り返して互いに無償で提供することで合意に達し、昭和53(1978)年にトンネルと上部の山を崩し、道幅も広げて歩道も確保し、青空や星空の見える現在の道になったのです。柿生方面から見て、柿生中学校の擁壁を過ぎると、左右に同色の黒っぽい擁壁が約60m続きます。ここが柿生隧道跡の切り通しです。(続く)

鶴見川流域の中世
その17

中世史料・資料の隠れた宝庫 恩田郷(その2)

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

前回に引き続き元禄二年(1689)成合村・恩田村裁許絵図(以下元禄絵図と略)と享保五年(1720)恩田村裁許絵図(以下享保絵図と略)を用いて恩田郷の景観復元を試みる。

「田畠」についてみると、元禄絵図では谷戸の大部分が水田化している様子が描かれている。人家の周囲や谷戸の奥部は畠になっている。丘陵上の平坦地は雑木林や野原の状態でほとんど開発されていない。恩田川左岸には恩田川から取水する上和田用水と奈良川から取水する待堰堀(用水)が描かれて、字堀ノ内と「部内最田地」(字地書上)と言われた字山ヶ谷をはじめとする広い沖積地の水田を灌漑している。用水の成立時期の解明が待たれる。戦国大名北条氏が永禄二年(1559)に作成した『小田原衆所領役帳』では恩田郷は127貫文余であったが、天正十三年(1585)の「恩田郷検地指出」では232貫文余と1.8倍に増加している。『小田原衆所領役帳』からは畠が33町歩存在した事も読み取れる。江戸幕府が17世紀中頃に作成した『武蔵田園簿』には高1148石余で内訳は田方744石(65%)、畑方403石(35%)と、その後石高の大きな変化は見られない。この様に恩田郷では戦国期から田畠の開墾が旺盛に行われて、元禄絵図は開墾の一定の到達点を表していると言えよう。

享保絵図に描かれた「人家」は恩田川を望む丘陵南側の緩斜面に沿った道(県道川崎町田線の旧道)や恩田川と並行して帯状に東西に伸びている。名主太郎左衛門家もこの一画を占めていた。この立地は恩田川の沖積低地にある耕作地を見渡し、日当たりが良く氾濫による水害から住居を守り、背後の丘陵と屋敷森が冬の季節風を遮る効果が期待できる。こうした集落景観の成立時期を考える上で参考になる事例が堀ノ内地区に残っていた。「部内第一の地」(字地書上)と言われた字堀ノ内は訴訟に直接関係の無い村の西側に位置するために享保絵図には描かれていないが、踏査すると杉山神社が鎮座する丘の麓に集落があり、台地の尾根筋には全長500mの空堀が「コの字」形に堀ノ内地区を囲みこむ様に延びていた(開墾により消滅)。調査報告書はこの空堀に15世紀という年代を与えている。発掘調査にともなって中世の五輪塔の部材と応永十四年銘(1407)・享徳元年銘(1452)の板碑が出土している事から、墓地が存在した可能性もある。付近の杉山神社や墓地にも宝篋印塔の部材を見かける。これらの石塔類の部材は形態から15~16世紀と考えられる事から空堀の年代と一致する。堀ノ内の地名から武士の城館を連想しがちであるが、中世考古学の研究によると集落を囲んだ領域区画と墓地は中世後期の村落景観であるという。すると空堀に囲まれた空間は城館ではなく15~16世紀に成立した集落の可能性もある。また、中世後期の「人家」はもっと少なかったと考えられるので、絵図の人家は割り引いて見る必要がある。

東側の大きな谷戸(しらとり川・現在の環状4号線)には南から順番に「かるい沢田・地獄田・仏山田・そり町田」と田圃の地名が記されているが人家は描かれてない。ところが『新編武蔵風土記稿』恩田村仏山の項には「村の中央をいう、小高の所にして古碑あり、文字は漫滅して読むべからず」とあり、仏山には古碑が建てられていた様子が記されている。『新編武蔵風土記稿』における古碑は板碑を表しているの、中世には仏山付近に人が住んでいた可能性も捨てきれない。一方の絵図西側は東側の谷戸とは違った景観である。絵図西端には支流の奈良川が造る大きな谷戸の左岸が描かれている。ここには薬師堂(本尊薬師如来像は平安後期の作)や人家が描かれている。薬師堂付近の通称「源氏山」家墓にはかつて慶長五年銘(1600)圭頭型墓碑と呼ばれる古い形態の墓塔があった(他所へ移動)。この享保絵図には描かれてないが谷戸の対岸には真言宗の古刹徳恩寺が所在する。また、白山谷戸奥の万年寺谷戸にあった万年寺(廃寺)には正中二年(1325)銘の梵鐘が所在(他所へ移動)し、付近の苗万坂からは14世紀末から15世紀制作の蔵骨器が出土している。西側は鎌倉時代から人が住み続けてきた事がわかる。以上見てきたように江戸時代の村絵図に文献史料・金石文資料・考古学資料・現地調査の情報などを加えて中世の景観復元を試みた。復元した景観を念頭に置いて中世恩田郷の史料を読み進めたい。

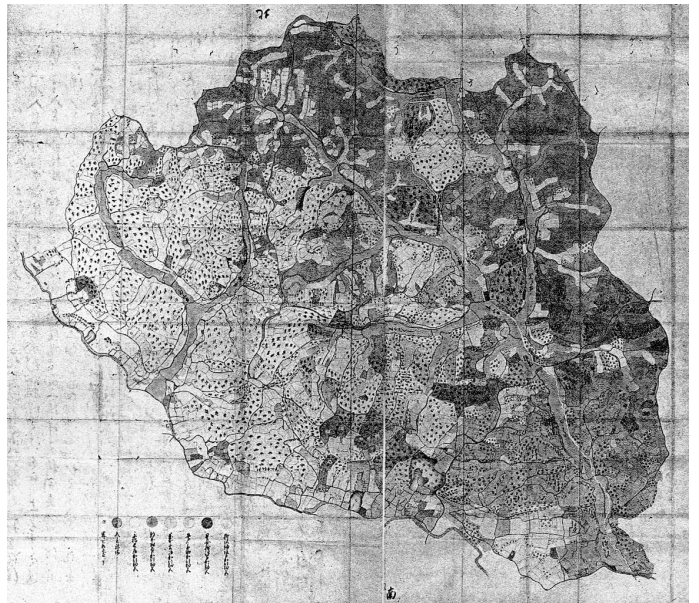


写真 享保五年(1720)恩田村裁許絵図

「青葉の村々と矢倉沢往還」より転載

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(13)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆人材の育成◆

明治政府は財政難を理由に、初等教育にはほとんど国家予算を振り向けず、地元負担での学校運営に頼っていたのですが、中・高等教育については、自ら旗を振って人材の育成を目指しました。明治政府にとって、欧米列強に倣った近代国家の建設は、日本の独立を守り抜くために、何としても実現しなければならぬ課題だったのです。

そんな明治政府にとっての最初の困難は、政府を運営するための人材の確保にありました。当初は幕末の志士たちが政府の参与となって実質的な権限を担ったのですが、彼らには国家運営の実務的な知識や経験がありません。そのため、江戸城に勤務して全国に目配りし、さらには欧米列強との難しい交渉をも担ってきた幕臣たちに頼らざるを得なかったのです。幕臣たちの協力なしに、新政府の行政機構を整備することは出来なかったのです。

明治政府は、厳しい財政事情の中にありながら、出費をいとわず語学に練達した若手官僚を欧米各国に派遣し、各国の法体系から立法府と行政府の関係、土木・建築から陸・海軍に教育まで、幅広い分野を学ばせ、情報を集めたのです。彼らが蒐集した欧米各国の資料は、国立公文書館などに保存されていますから、読むことが出来るのですが、各国の事例が網羅的に整理されており、国費で派遣されたことを重く受け止め、不眠不休の努力を続けたであろうことに頭が下がります。明治政府は、こうした若手官僚の努力の成果を生かして、日本に合う形を選び取っていったのです。

派遣された若手官僚の出自を見ると、当初は薩摩や長州など「官軍」の中核を担った西南雄藩の若手を中心でした。明治政府は、欧米の学問(洋学)を学ぶことの重要性を承知しており、明治2(1869)年には、幕府から接收した昌平坂学問所や開成所、医学所を編成替えて「大学所」を設置、特に洋学を重視して、明治3(1870)年7月大学南校として独立させました。

後に東京大学の一部を構成することになる大学南校の学生は、当初「官軍」の子弟のみが入学を許されていたのですが、まず学生たちがこの状況に異を唱えます。彼ら有為の若者たちは、幕末の私塾で各地の若者たちと切磋琢磨を続けており、優秀な若者たちが全国にいることを知悉していたからです。彼らは、「より広く学問の門戸を開放するべきである」と建議したのです。当時の藩閥政府も、西南雄藩の子弟だけでは、政府が必要とする人材に不足することを理解していたのでしょうか。この学生たちの建議をただちに受け入れ、明治3年の年末に「大藩は3名、中藩は2名、小藩は1名の有為な若者を大学南校に推薦し、送り出すように」と命じたのです。「貢進生」制度の始まりです。南校の授業は日本に招かれた外国人教師による英語で行われるため、英語を解する優秀な若者である事が推薦の条件でした。



明治6年(1873年)当時の開成学校(後の東京大学)

こうして大学南校で欧米の学問を学んだ学生たちは、更なる研鑽を求めて欧米への留学を願い出ると順番に認められ、欧米の最先端の知識を持ち帰り、帰国後は官僚となって国家建設の第一線で指導的立場に立つことになったのです。全国から集められた優秀な人材が、切磋琢磨しながら官庁で指導的立場に就いたのです。やがて彼らは藩閥に代わって学閥を構成し、優秀な頭脳の持ち主が官僚や軍人、そして一部政治家や学者として、日本社会を牽引することになったのです。中国や朝鮮においても、西洋の衝撃を受けて、国家の近代化を目指しての改革が試みられたのですが、いずれも失敗に終わりました。それは、日本と違って家柄に基づく門閥に拘り、能力に基づく人材の登用が出来なかったからにほかなりません。



医学校本館 小石川植物園に移築され現存している

明治政府の人材登用の野心は、さらに先を見ていました。それは旧士族層や都市の裕福な町家の子ども達だけでなく、より広く下層民衆の中からも、頭脳明晰な子ども達があれば、地域の総力をあげて教育を受けさせることを奨励して、国家有為の人材の層を厚くしようと試みたことにあります。地域に委ねた全国民対象の初等教育の取組には、こうした狙いも含まれていたのです。 続く

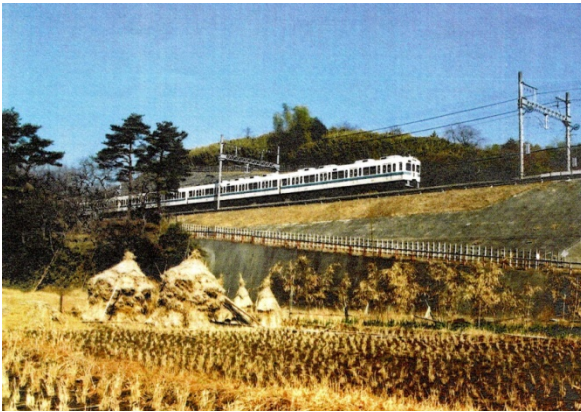
誌上特別展

写真で見るふるさとの原風景(1) 黒川・はるひ野

第19回特別企画展「写真で見るふるさとの原風景」を、本誌上でもご紹介していきます。

第1回目は黒川・はるひ野です。黒川は、かつては川崎の子バットと呼ばれた寒村でした。そのため1年生～4年生までの子ども達に通う柿生小学校の黒川分校は、昭和58年(1983年)まで、川崎で唯一の分教場として存続しました。片平の本校まで約4kmの道のりを、幼い子供たちが通うのは難しかったからで、5、6年生だけが、本校まで通ったのです。74年に多摩線が開通。周辺の宅地化が進み、近くに栗木台小学校が出来、黒川の子ども達も通学区域に含まれたからです。分教場の跡地は、現在川崎市の野外活動センターとなっています。

黒川の人たちは、学習に力を入れると同時に、僅かな田畑を大切に、山間の比較的傾斜のゆるい土地まで水田として整備するなど、農地の整備に勤めたため、柳町(やなぎのまち)などの棚田の風景は、まさに「ふるさとの原風景」として親しまれてきたのです。



後のはるひ野駅付近を通過する小田急多摩線と稲藁ポッチ (平成3年<1991年>2月)



はるひ野新駅 開業の約1か月前の様子 (平成16年<2004年>11月)



黒川分教場 平成元年撮影 昭和58年(1983年)3月にて廃校となり人影はない



開通13年後の多摩線黒川駅付近 (昭和62年<1987年>11月)



柳町(やなぎのまち)の青々とした棚田(水田)と丁寧に耕された畑 (平成2年<1990年>4月)

【お詫びと訂正】前号5月号の写真1と写真4の説明が間違っておりました。お詫びして訂正します。写真1は修廣寺ではなく、豪農の民家でした。写真4は工事中の新百合ヶ丘駅(右手山中)付近を走る小田急線です。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

11月 6月 12・19・26日(毎土曜日) 7月 4・11・18・25日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時(緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です)

第19回 特別企画展

写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生村地区村々の変遷の様子をお楽しみください。開催日程が変更になっていますのでご注意ください。

期間 6月12日(土)～9月26日(日) 会場 柿生郷土史料館特別展示室